

寝取らせ妻

麻理子

「妊活」のため妻を

他人の男に抱かせてみた

沢見独去



プロローグ

私と麻理子が結婚してもう三年になる。

妻は現在二十八歳。地元では有名な資産家のひとり娘で、私は妻の家に入婿というかたちで入った。

そもそも二人が出会ったのは大学のゼミだった。私のほうが三学年先輩で、いろいろと相談に乗るうちにそういう関係になった。はじめて体を重ねたとき、麻理子は処女だった。白いシーツについた真っ赤な血を今でも鮮明に思い出せる。

大学を出てしばらくは一般企業に勤めていたが、結婚を機に彼女の実家の系列会社に転職、次期社長として経営を勉強する日々だ。妻はいわゆる専業主婦で、実家に買い与えられたマンションで、家事を担ってくれている。

麻理子も、それから彼女の両親も、早く子供が授



かることを期待していた。妻は学生のころから子供がほしいと言っていたし、家としても跡取りが絶対に必要だった。

しかし、なかなか懐妊の兆しは訪れなかった。

麻理子は「妊活」をするため産婦人科へ二人揃って行こうと言ってきている。彼女の両親も会うたびに、孫はまだかとプレッシャーをかけてくる。

正直、種馬になったみたいでいい気はしなかったが、旧家に婿に入ったからにはしかたがないと思っていた。

だが……私は我が家のLDKのソファに座る妻を前にして、ごくりと唾を飲みこんだ。彼女は緊張している私のほうを、戸惑いを含んだ目で見ている。

何度か口を開きかけては閉じ、そして勇気をふるってとうとう私はそのことを妻に切り出した。



「麻理子……他の男と、寝てほしいんだ」

「えっ!？」

妻はそう言ったきり絶句している。

わたしはスーツの内ポケットから一枚の書類を取り出し、それを困惑している彼女に手渡した。

「医者に行ってきたんだ。どうやら私は無精子症、子胤を持っていないらしい」

そうではないかという思いはずいぶん前からあった。しかしそれが確定したのはほんの数日前だ。

麻理子は目を見開いてその書類を見つめている。

私を声を絞り出すようにして続けた。

「このままだと私たち夫婦には子供が授からない。このことがもし両親に知られたら、離婚させられ

るだろう」

「そ、そんな……」

「だから、両親にばれないように、他の男と子供を作ってほしいんだ」

「ええっ？！　だからといって、それは……」

わたしは考えていた説得の言葉を口にする。

「愛してるんだ、麻理子。それに、私は今の地位も手放したくない。せっかく会社のこともわかってきたんだ。君と別れたくない」

妻はじっと耳をそばだてて私の話を聞いている。

「わかってからずっと考えていたんだが、やっぱりこれがいちばんましなやり方なんだ」

「で、でも……病院で治療とかはできないの？」

私は首を振った。

「無精子症は生まれつきだと言われた。治らないし、まったく精子がないから、子供を作ることとは見込めない」

「そんな……」

愛する妻の目をじっと見つめる。

「妊活しても、どうせ他人の子胤をもらわなきゃならない。しかもそうすると、両親やほかの連中に私のことがばれてしまう」

「それはそうかもしれないけど……だからといって」

「たのむ。もうこれしか方法がないんだ」

私は妻に深く頭を下げた。床をにらみつけながら、頭を下げ続けた。

しばらくの沈黙のあと、おずおずと妻が言う。

「……で、でも……いったい、誰と……？」

私は顔を上げ、妻の顔を見つめ、うなずいた。

「目処はつけてある」

そしてジャケットの懐から、さらにもう一枚の書類を取り出した。

「この男だ」

私が目をつけた相手は、名前を野坂という。少し年上だが、私の今の会社の部下にあたる男だ。

はじめはまったく知らない人間をなんとかして雇おうかとも思ったが、それよりも知った者のほう

がリスクを避けられるのではないかと判断した。

この男は十代のうちに結婚して、もう奥さんとのあいだに四人も子供を作っている。そして遊び人で、それ以外にも何人も体の関係だけの女がいるといつも吹聴していた。

そういうような男のほうが、なにかと都合がいいのではと、その時は思っていた。

月に一度、妻がいちばん妊娠しやすい日にセックスすること、懐妊したとき父親の権利を主張しないこと、すべてを口外しないこと。事細かに契約書にして署名をもらっている。

そんなことを説明すると、しぶしぶではあったが、妻は私の提案に同意してくれた。

それから何度も、これでいいのか自問した。もちろん、私に腹立ちや嫉妬の気持ちがないと言えバウソになる。だがこの時は、それよりも今の地

位や立場を守ること必死だった。

麻理子はそれからも決心がにぶるようで、何度も考え直そうと言ってきたが、そのたびにこれよりほかに方法はないと説得していた。

計画は万全だ。

そして今夜、妻が他人の男に抱かれる。



(1) 夫

場所は自宅から離れた都内のホテルだった。

夕方、妻が出かける支度をしてリビングに入ってきた。

「あなた……ほ、ほんとうに……するの？」

私は彼女の目を見て大きくうなずく。

「何度も話しあっただろう？ これしか方法はないんだ」

麻理子は思い詰めたように唇をかみながら、小さくうなずいた。

「……わかってるけど……」

「いいか。これは子供を作るためにすることなんだ。」



私たちの子供だ」

「……そうね」

私はリビングのソファから立ち上がり、妻をきつく抱きしめた。

「愛してる、麻理子」

「わ、わたしも……愛してます」

軽くキスをかわす。

そして迷い、戸惑いながらも、妻は出ていった。

ひとり我が家のリビングに取り残された私は、急に寂しさと、そして奈落の底に落ちていくような不安を感じる。

それを必死に振り払って、妻が事前に用意してく

れていた夕食をいただき、そしてあまり飲めない酒をあおった。

妻は以前からそれほどセックスに対して積極的なほうではなかった。感じるのもひかえめで、いったかどうか、私にはよくわからないくらいだ。

私のほうも仕事が忙しいし、もうすでにセックスは子作りのための義務のようになっていた。

それでも、やはり自分の妻が他人に抱かれることは、私の中に抑えきれない嫉妬を生んでいた。

しかも相手はあの野坂だ。いつもちゃらけていて、真面目にしているところなど見たことがない。

そんな奴に頭を下げて、妻を抱いてくれと頼むのは屈辱だった。向こうはそんなことはおかまいなしに、報酬につられてほしいと依頼を受けたが。

ラインが着信した。野坂からだ。



麻理子の写真が添付されている。

「くっ」

私は思わずそう口に出していた。

〈ホテルに着いたっすよ～。専務の奥さんは、今、シャワーでーす。いちおう証拠の写真送ってきますね～〉

その軽薄なメッセージの書き方がよけいに腹立ちをかきたてた。嫉妬の暗い炎がめらめらと湧き上がり、情けないほど動揺していた。

〈しかし専務の奥さん、なかなかいい体してますねえ。いっぱい子作り（笑）に励ましてもらおうっす！〉

そして動画が送られてくる。私は震える手で、それをタップした。

『や、やめてくださいっ！』



妻の声が聞こえた。質の悪い動画が、がくがくとぶれる。

『や。専務にちゃんと契約果たしてるって証拠映像っす』

『そ、そんなの……いりませんかっ』

妻が身をよじってカメラから逃れようとするが、それを執拗に追いかけて野坂は撮り続ける。

『まあまあ。ちょっとだけだから。専務見てますかあ？　ちゃんと子作りしますからねえ』

私はスマートフォンを見つめながら思わず歯を食いしばる。

「くそっ」

そんな悪態が口をつく。スマートフォンを持つ手に力が入る。



『ほんとに、やめてくださいっ』

『そうっすか？　じゃあ……はじめますか。では専務、奥さんといっちなさせていただきますーすっ』

動画を撮りながら、野坂の反対の手が妻の体の方に伸びる。

『あああっ』

その手がタオルを剥ぎ取ろうとした瞬間、動画は途切れた。

私はまた、焦りをつのらせる。心臓がうるさいほどに早鐘を打ち、息が荒くなっていく。

「くそっ！　くそっ！」

私は我が家のソファに座りながら怒りと嫉妬に震えていた。

気づくと、私のズボンの中のイチモツは、固く勃起している。そのことに困惑しながら、頭をかかえてまた唸りを上げた。

それからの時間は長かった。

妻が、帰ってこない。

野坂からの連絡もない。

何度ラインしても電話しても、二人とも出ない。リビングのソファに座り続けたまま、気がつくと夜が明けていた。

玄関の鍵が開く音がし、ようやく妻が帰ってきた。私は慌てて立ち上がり、玄関へ向かう。

「麻理子っ！」

「あ、あなた……」



「いったい何時だと思ってるんだ?! 野坂とは一回やったらすぐに終わる約束だろう? 今までなにやってたんだっ」

「ごめんなさい……」

そうつぶやく妻の顔はやつれ、髪は乱れている。

「あの人が……その……なかなか出なくて」

「なんだとっ、それで朝までかかったっていうのか?!」

「……はい。ずっと……」

そうささやく妻の顔が、さらに赤らんだ。

「ど、どうだったんだ?」

妻は足元も定まらないようで、すこしふらつき、



食卓に手をついて体を支えた。

「お願い……休ませてください……」

「だ、だめだ。どうだったか、ちゃんと話さない」

麻理子はのろのろとキッチンへ行き、コップに水を入れるとごくごくと飲み干した。そのまま気怠げに食卓に座った。

「その……ちゃんと……しました」

私も彼女の前のいつもの席に座り、じっと彼女を見つめた。

「朝までずっとしてたのか？」

「……はい」

野坂に抱かれる妻の姿が、脳裏から離れない。



「それで……き、気持ちよかったのか??」

そう言うと、妻は目を見張って首を振った。

「そ、そんなこと……ないわ。子作りのために
したこと……あなたもそう言ってたじゃない!」

「もちろんそれはそうだが……しかし麻理子のその
様子を見てると、心配なんだっ」

「……朝までずっと……されたから……」

私の頭にさらに血が昇った。

「くっ」

私はうつむいて歯を食いしばった。気がつくとパ
ンツの中で、股間のイチモツがまた固くなってい
た。そのままふりしぼるように声を出す。



「あいつ……野坂のものは、私とくらべてどうだったんだっ」

「そんなこと……聞かないでくださいっ……」

「どうだったんだっ！」

「あああ……あなたのと比べて、大きくて、太かったです……」

私はうつむいたまま目を閉じた。嫉妬の嵐が、胸の中を荒れ狂っている。ひとりでに勃起した股間のものが、びくびくとうずいている。

「でもっ……わたしはあなたを愛してます……それに、妊娠したら、もう二度と会わない人よ……」

しばらくの沈黙のあと、妻のため息が聞こえた。

「お、お願い……あなた……もうわたし、くたくたなの。休ませて……」

そう言うなり気怠げに立ち上がり、麻理子は寝室へと入っていった。

「おい！　麻理子！！　おいっ！」

あとを追いかけると、彼女は服を着たままベッドに倒れ伏し、すやすやと気持ちよさそうに寝息を立てている。

その顔はまだ紅潮している。

「くそっ」

無理に起こすわけにもいかず、私はうつむいてまた悪態をついた。

リビングに戻ってソファに座る。いらいらと貧乏

揺すりをし、足を踏みならす。

「いったい、どうなってるんだ？！ 野坂のやつっ」

私はがまんしきれずに、とうとう野坂に電話を入れた。何度かのコールののち、男が電話に出た。

『はい？ あ、専務』

「おまえ、朝までなにやってたんだっ」

『あー。オレ遅漏なんっすよ。なかなか出なくって。だって子作りしなきゃでしょ？ 出さないと』

電話の向こうで野坂がにやりと笑う気配がした。

『でもちゃんと奥さんに中出ししたっすよ。赤ちゃんできてたらいいですねえ』

「それはおまえには関係ないっ！」

『まあ、そうなんですけどね。あ、オレ朝までがんばっちゃったんで、今日は仕事休ませてもらいますね～。専務、そのへんテキトーによろしく』

私は呆れた声を出した。

「おまえは……」

『あ、中出しの証拠いるっすよね？ 写真送ります』

「なにっ？ と、撮ったのか？」

『まあまあ。あとで送りますよ。赤ちゃんできてなかったら、また来月もよろしくです～。じゃあオレ、寝ますね』

「おいっ、もしもしっ……野坂っ」

一方的に電話が切れた。しばらくするとラインにメッセージが来た。写真が貼り込まれている。



「な、なんだこれはっ！」

その写真を見た途端、ショックに全身が震えた。

こんな妻の顔は……つきあって以来、一度も見たことがない。

思わず寝室のほうをにらみつけながら、私は言葉もなくスマートフォンを握りしめていた。

どれほどそうしていただろう。時計を見るともう出勤の時間だった。野坂と違い、欠勤するわけにはいかない。

私は一睡もせずに会社へと向かった。

(2) 妻

麻理子が起きると、もう昼を過ぎていた。夫は会社へ行ったようで、マンションには他に誰もいない。

こんなときにまで出勤するなんて、あの人らしい。

彼女はそう思って苦笑する。そんな真面目なところを、好ましく思っていたのだが……。

「あんっ」

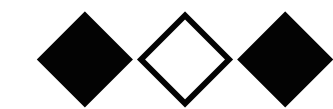
ベッドに横たわりながら、人妻は甘い声を出す。

身体の奥、女にしかない部分が、まだじんじんとしびれている。大量に中出しされた男の精液が、腹の中にとどまっているのをまざまざと感じる。

夫にはなんとかごまかしたが、野坂とのセックス

は、今まで経験したことのない、とてつもない快樂だった。

麻理子を目を閉じて、昨晚のことを思い出す。



指定されたホテルの部屋に行くと、野坂はもうすでに部屋にいた。麻理子の姿を見ると、軽薄そうに笑った。

「やあやあ奥さんいらっしやい。今日はよろしくお願いします～」

何も言えない麻理子をベッドの端に座らせると、自分のスマートフォンでかちゃりと写真を撮った。

麻理子は慌てて言った。

「ま、待ってくださいっ……なんで写真撮るん



ですか??」

「そりゃ専務に証拠写真送るためっすよ。ちゃんと
したって証明しないと、だめっしょ」

野坂はそう言うと、麻理子の体をじろじろと舐め
るように眺めた。

「うん。会社で見かけたときから、奥さんいいオン
ナだなあって思ってたんすよ。エロいカラダして
そうだし……」

「そ、そんなことっ」

「いやあ、オレ、役得だなあ。せっかくだから、お
互いに気持ちよくなりましょうねっ」

「そ、そんな気持ちよくなんてっ……これは子
供を作るためにすることです。野坂さんにお
願いしてるのは……その……わたしを……妊



娠させることだけですっ」

勢いづいてそういう麻理子に、彼はにやにや笑いを顔に貼りつけたままうなずいた。

「わかってますって、奥さん。でも、この場はオレの指示に従うことって、契約にあったっしょ。言うこと、聞いてもらいますよ」

たしかに夫の交わした契約書には、野坂からの要望によってそう書いてあった。

「で、どうします。シャワー浴びます？ それともこのままします？」

「……シャ、シャワー浴びます」

「一緒に浴びる？」

「……さ、先に、入ってくださいっ」



照れる彼女をおもしろそうな顔で見て、それから男はバスルームに行った。入れ替わりに麻理子もシャワーを浴びる。

(ああ、どうしてこんなことになったんだろう)

あたたかな水滴に囲まれながら、彼女は思った。

(夫の説得にうなずいてしまったけど、他人とエッチするなんて……)

そもそも麻理子はセックスがあまり好きではなかった。経験も夫だけだし、他の男に抱かれるなんて、想像するだけでいやだった。

(でも、これもみんな赤ちゃんのため。野坂さんにはさっさと終わらせてもらって、子供が授かったら夫婦の子として、大切に育てよう……そして今日のことはきれいさっぱり忘れてしまおう……)

体験版は以上です。
この続きは、製品版でおたのしみください。